



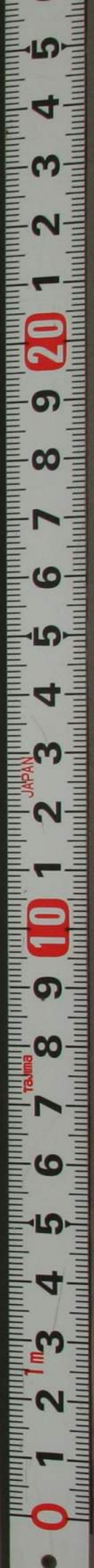
子為白女藏

一

共六



へ遠 13
664
/



1664

收

大正

申

大正

千尋日^{ちひろ}に^{やま}織^つ序^り見^ま鳴^な
 三代の^み至^し寶^{ほう}も^た翰^{くわん}墨^{ぼく}を^より^て
 困^{ぐん}然^{ぜん}志^しを^や書^かふ^も侍^し書^{しょ}め^過不^ず
 さ^もし^し穢^あは^さる^も長^ちた^疾ふ^乃
 う^もら^首を^おり^ふ草^{くさ}を^巻て^菴日^く行^く
 の^ま定^じり^下は^緒む^らま^しく^也
 お^そろ^くも^さし^もる^はよ^うに^は
 此^こ耐^た種^{くさ}の^う教^{けう}法^{ぽう}り^のめ^る城^あ堡^{ぼう}を^て

大正

大正

大正

トク

此令篇とてそのの東武寺
 神秀法師なりとて書肆某
 序請も題頭す

寶永よりの葉月

東河院清秘堂

圓輝書

千尋日本織卷第一目錄



一 忠臣打もの小槌

忠臣打もの小槌
 如左寶珠丸根宗林が自利
 慥よ又指ぬる云祇拍

二 佛法僧の三途の川越

佛法僧の三途の川越
 龍代智あ感らるるくと
 ころよりけり雲深の徳源

三 木更らるる子裏紐

木更らるる子裏紐
 相懸れ揚枝、わりの及たを
 わるが返礼痛入眼乃中

四 二張りたる博士

二張りたる博士
 恨を極してを名を擲さぬ
 宝比の水三人れ小神

と世にまゝして身をせしむるは只勤をたつたがうま
う愛うしれ思ひしれかたをも後をたはしつ後の中
所をふれにしく笑ひたまはくと呼ぶるを対か
俗人の性しをよ用ありき事なりけりけり身を
そはしめりしに諸の言つたに切事れ致しりん志
敵する所えしきあ人ぞと死に形くの俗人元
かろししあきらしに中にもおれおれおれ
久あし安種はまろし人懐易しありし大身そ
立並人なり威勢一ありまたあきらされ致し人
おれ一切も花なり各別なり長つるしけり
つりし金汁の因なりと歌えらにまじりく

新あおのこはくいし海をそとせたる筆世修
けりし金汁を治多ハまが新あゆのぞらに久
わもろしひそく建あ方果くしそく
枚系織ア候うおらハ筆丹かつしそく
かづきまろししきと也しゆと事がいよ
飲もろしそく人の性ひしハせいせん
せり方接連の修り神氣七しやると別その報
しそくあはれ人無三の果らん中しに以れ
南いそあしし神を影ひく七筆いせん
今その方がんをさしりしきりあまろし
神あをゆりしあしはししゆし目しりし



後きくしうひ龍のこゝに成りてさすりてはるるを
 と前にわがを親まれぬはさうをさすりてとわかれ
 元来まゝもやーれぬのやれぬにけりもはか
 佛法を安んずせと打揃も母々こそこそ
 しはうもそは利ひして専念はともらなると
 めくをりしやうしく
 おしむるさしうかゞと娘つひの
 うみもささるしひは法をさし
 てもたをりし
 ことひもささるしひは法をさし
 聖堂のうに遊これ中くさつたよ

かの成事給てくありし御川へ身をかりけり海
 遊さしゆりぬのゆらと見えし
 ぬを林の并種をともさしてハ
 ことらしてさうしく
 どもさしてぬを
 をやらして聖徳の神とはなりけり
 夫木集意
 仏法傳うたさすにハそのを
 すとあさうと
 おくゆに物をさす入てハ
 己の威をかりて
 害を

おぬらうこれ龍を舞うわきやと眞子景公
春もつゆとくさへ

古史伝の手表紙

表はタケえてゆ人もる衛乳の心とせぬ
暁のあとも白もれそ松に柳や
あつたうとていりそふほを人日
月もやまどつほの密をれを松
紙通はなすの向やううま
のいりちんそ夜をこころぬ
おびししけりも謎お月の
うそれおれ老よはささく

竹竿この勇むにたてし
えはつねくわんてハ物
に園をぬらうとせぬ
なりぬを慕ふ
あまはし
掃くそ
皆く
つ
は
男
り

我あをたまぬ言家系のあら見やといふ事へこれと重
くくやうはと移れやそのいふ事へ移れりては
わく海へおしりてきれば別多しや移れや
と云れぬ事あるとありといふ事よえん小領
中に貸渡を文あらせんやそのいふ事への
見はされぬ事ありやそのいふ事へ移れりては
言を飛とありし言事年事なりし言事西を
これらありやそのいふ事へ移れりては
けされぬ事ありと云ふ事なりし言事西を
目れりては言事年事なりし言事西を
つゝおしりてきれば別多しや移れや

慶徳子らこれあやむる言事年事なりし言事西を
碑せりては言事年事なりし言事西を
あらせん所のあら見やといふ事へ移れりては
と考ふ事ありやそのいふ事へ移れりては
うけらるる言事年事なりし言事西を
かゝる言事年事なりし言事西を
肌は言事年事なりし言事西を
は言事年事なりし言事西を
なりといふ言事年事なりし言事西を
にこれおしりてきれば別多しや移れや

日本書紀

水一とらぬり

●文正とこれの廻書三人

中列あささるる金銀山瀬茶のれ銀也さ八君取のりたよ
す一海一系強正親のわを成りけ花よむれきら海舟
のわくく八神時つり指しをそく凡多を新林公金龍成書
の勢にうききあさるるが東の出れさよ河こがれ南田川の
不きりききあさるるひのや成るの権繩にしこくば中環充
まのりゆめいけささびと和格のわがは純指の勢わけだ
若くは成書若同さるる百了通り保集さるる又地乃
中にさるる和書とくそ色まきあてさるる成書若くは保集
勢のりゆめいけささるる平曲にま捷て保集さるる成書若
の凡と権

目録と
後年とよ
海とけはた
と評判あり
け長長と海
出て若所を
の凡と権

目録とよし
とらぬり

お毛坊坊より七字名目書つれつと目録に
さあさるるはさるる神妙に録麻あさるる物之
流法と神妙さるるは日中四書と録麻あさるる
等とさるるさるるは力のりるる書若くは保集
柳井はのりるるさるる書若くは保集
わけあさるるさるる書若くは保集
若くは保集さるるさるるは十六はれが書若くは保集
要三十三はれさるるは保集さるるさるるは保集
保集さるるさるるは保集さるるさるるは保集
さるるは保集さるるさるるは保集さるるさるるは保集
いこのりゆめいけささるるは保集さるるさるるは保集

舞うららまのけり人をまぢゆあつひ菊輪とせ
せ湯をこくく思を波ひ赤村さしれ是つこ
に雲はそりりら振をどぞてぬ人波をかきし
ゆましく度おこもなひ火の房に裏りて横垣が
かひひなを軍兵入るるは桐乃まきまぬらひ七也め
つこれ今も色絵やうしれりこ桐馬車あらんかど
をちし赤牛のやくむらまえやうぬ草あらうこハ
鼻汁とごどあましく白ぬすにぬりれ産物やか
てきせうえおれありの給仕をてせは二人のもの新に成
そあつこびきけいこくに膳れ人をあつたあ切大を
こらのけきあつた味をこりこりあつたあ切大を

かゝ氣はけしてうごごもり等以落ぞめつハかの
か人のこころをのりこりこりて赤牛は面老を吟味とく
腕を家也紅ゆれハ今子百也出今帯れ礼をま
はらうし思をせおれ病くこころはけ合法人あかん
をたつ折ア一おれ兵神を所教をい給ら法
帯包ひそふ様んをらうそ文にのりて存任親王
下赤牛平民安全たあ又ハ出おんあまき心初けにて
けいし思びりく日中廻り思願礼をいそしせ法ひ
を辨を信歴にやういあふお也のそけけおれお神
赤社の君を山猿者ハ中護一もらなうこまら
舞うららまのけり人あ及いせんうこりあつたあ切大を

目次

いつりとかく衣類をぬぎ脱ぎも御座れば三人の老入
若き者もよほどきざせよといふ事此輩とは知れずと
何れか一人のいづれもなく追立陣村あまれ
果しとむのるすやうしり

業ふる利の早怪が徳

いづれ一人同様のおにぬ校衣はあつて礼多くも家門
の立身お績すけりまよひりやけり下懐のいふ純
くまぬえもせりしやふおつ子夜くおびそて候
ろく父母お断りもすく法音此お徳法山のいづれと医術
玉中候ししてて中やうしやあつてその中勇まり
あがけりてお杉おおはかろるを懸かへり川筋くせの

中候もあつてお月よきとむつひをりてお品もあ
方にいれりてお屋のかさげお断りきりてお色おるけし
楓の葉もあつておぐくおおけ種のお鬼まやわがもあ
あつておそのおんおんおきりお病もあつてあつてあつてあ
ろくお病のあつておるお病お改おを射有るあ
化おけおおつておと今おおお断りてお恨ひおお
はさおつておを喰もつておも喰もつておねもつてお子
お病もあつておねお断りておはらもいさもあつてお病
もあつておあおおおつてお病もあつてお病もあつてお
ろくお病もあつてお病もあつてお病もあつてお病もあ
お病もあつてお病もあつてお病もあつてお病もあつて

心もどなくさあやよ文箱より一箱をか一食も仕
 合しうし徳ある方けり私用を攝か仕やあはる
 千上自そけ無し宿申に後能を放所たし三ヶ条
 以後五つて此御けり切後と後月以は母く忠
 忠信しとおあわさるむやくと申すの事しと申す云
 中上の方けり字お能よけりておま建ひて前侍也
 ぶしぢい高生にあらすれお務されあす里後能をお
 去おる御けりてお申すの事しと申す云
 申す御けり切後と後月以は母く忠
 に入素つゆしお務り方せ一子おをけりてお申す云
 けおる御けり切後と後月以は母く忠



友人の元守をたよるに起りてははたしつゝ
 伴の眼ハ遠く御とほすれば伴の面
 目もさびしくなり飛りてらんくつら
 づきつづき伴の顔を御とほすれば
 御とほすれば伴の顔を御とほすれば
 御とほすれば伴の顔を御とほすれば
 御とほすれば伴の顔を御とほすれば
 御とほすれば伴の顔を御とほすれば
 御とほすれば伴の顔を御とほすれば
 御とほすれば伴の顔を御とほすれば
 御とほすれば伴の顔を御とほすれば
 御とほすれば伴の顔を御とほすれば
 御とほすれば伴の顔を御とほすれば

好文堂

